

ピューリッツァー賞カメラマンが戦場で見つめた悲しみと希望。



Getty Images 1.



Getty Images 2.

写真家 PHOTOGRAPHER KYOICHI SAWADA

沢田教一展

— その視線の先に —

2018年3月14日(水) - 25日(日) 京都高島屋7階 グランドホール

[ご入場時間] 午前10時～午後7時30分(午後8時閉場) ※最終日3月25日(日) は午後4時30分まで(午後5時閉場)

入場料(税込) 一般800円(600円)、大学・高校生600円(400円)、中学生以下無料

※()内は前売り及び団体10名様以上の割引料金。前売券は京都高島屋7階チケットカウンターにて2月14日(水)から3月13日(火)までお求めいただけます。※当催については、「障がい者手帳」をご提示いただいたご本人様、ならびに、ご同伴者1名様まで入場無料とさせていただきます。*トワイライトサービス：午後6時からは半額。

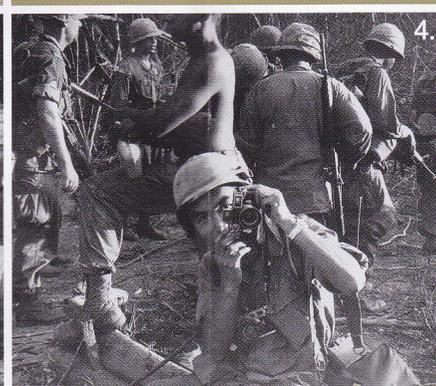
※安全のため、小学生以下のおこさまは必ず保護者の方ご同伴でご入場ください。

主催：朝日新聞社 企画協力：沢田サタ、斉藤光政 協力：山川出版社

1. 「安全への逃避」(1965年9月) ※1966年度ピューリッツァー賞 ※第9回世界報道写真展大賞 2. 市街戦の痕跡が残るフエで(1968年4月)
3. 砲弾の音が響くフエで(1968年2月) 4. 行軍する米兵にカメラを向ける沢田(撮影年月不明) 5. サイゴンの子供たち(1970年2月)



3.



4.



5.

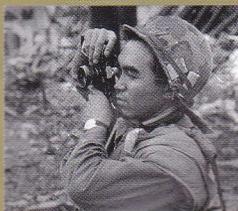
写真家 PHOTOGRAPHER KYOICHI SAWADA

沢田教一展

— その視線の先に

2018年3月14日(水) - 25日(日) 京都高島屋7階 グランドホール

1965年からベトナム戦争で米軍に同行取材し、最前線で激しい戦闘や兵士の表情などを数多く写真に収めた写真家、沢田教一(1936-70)。輝かしい実績を残し、「安全への逃避」でピューリッツァー賞を獲得しています。沢田の写真に通底するのは、優しい眼差し。疲れ果てた名もなき兵士はうずくまり、家を追われた罪なき市民は荷物を抱え、故郷・青森の貧しい漁民には寒風が吹きすさぶ……。しかし皆、かすかな希望を頼りに強く懸命に日々を生きていました。その「希望」こそ、沢田が追い続けた被写体だったのではないのでしょうか。妻・サタさんをはじめ関係者の証言を紡ぎながら、34歳で殉職した沢田の業績をたどります。



故郷・青森への思い、妻・サタとの出会い

三沢基地の写真店で、のちに妻となるサタと出会った沢田。ふるさと青森の原風景をカメラに収めながら腕をみがき、東京へ、世界へ、思いを広げていきます。



青森の集落で (1950年代後半)

妻・サタをモデルに (1950年代後半)

ベトナム戦争、その最前線で

「どこの戦場にも必ず沢田がいる」。ジャーナリスト仲間が感嘆するほど、常に沢田は最前線でシャッターを切りました。そして「安全への逃避」(表面上部写真)でピューリッツァー賞を獲得、瞬く間に一流写真家の仲間入りを果たします。



ベトナム・フエでの市街戦(1968年2月)



ベトナム・フエでの市街戦(1968年2月)

「安全への逃避」で世界報道写真コンテスト大賞 受賞時の沢田教一



疲弊する兵士、傷つく市民

激しい戦闘のさなかでも、沢田の眼は被写体に寄り添っていました。疲れ果てた兵士や嘆き悲しむ市民の心の声を切り取ることが、戦争を報じることの核心だったのです。



戦死者を運ぶ米兵(1967年5月)



難民キャンプに退避する市民(1968年1月)

平和を愛し、未来を見つめる

「平和になったベトナムをゆっくり撮影旅行したい。」そう願っていた沢田は、行く先々で懸命に生きる市民や子供たちの笑顔を書きました。戦場カメラマンと呼ばれるのを嫌がった「写真家・沢田教一」の眼差しの先にあったものは、



子供たちの無邪気な笑顔(撮影年月不明)



香港の街角で(1969年)

 **Takashimaya** KYOTO

www.takashimaya.co.jp

TEL (075) 221-8811